

林 重雄<sup>1</sup>・小寺仁美<sup>2</sup>：石川県加賀市塩屋海岸にオウムガイ *Nautilus pompilius* の漂着  
 Shigeo HAYASHI<sup>1</sup> and Hitomi KODERA<sup>2</sup> : Stranding record of *Nautilus pompilius* on Shioya beach, Kaga-City, Ishikawa Prefecture, Japan

オウムガイ (*Nautilus pompilius* Linnaeus 1758) は、太平洋熱帯海域に広く生息する頭足類の一種である (奥谷 2000)。オウムガイ類は水深50~600m前後を垂直移動する生態を示すことから、殻に浮力を調整するための隔壁構造を持っている。そのためオウムガイは死後も、殻内部に海水が入らないまま長期間浮遊し、海流によって本来の生息域から遠く離れた海域へ運ばれ、漂着することが知られている (浜田 1965; Hamada 1977など)。

今回、本州中部の石川県加賀市で漂着を確認したのでここに記載する。

漂着記録

筆者のうち小寺は2010年12月23日、石川県加賀市塩屋海岸 (図1) で漂着物の調査中に漂着オウムガイを採集した。塩屋海岸は石川県最南端部にあたり、大聖寺川の運搬する土砂が沿岸流によって運ばれて形成された砂浜海岸である。塩屋海岸は大聖寺川の河口からおよそ4km

北東にある片野まで続いている。塩屋海岸の北西側は海に面し、秋から冬にかけ季節風が吹き出すと、漂着物が寄り集まりやすい場所である。塩屋海岸では2010年12月にココヤシ、ゴバンノアシ、シナアブラギリ、ハマナタマメ、ワニグチモダマ、モダマといった熱帯植物の種子や果実の漂着を確認している (林重雄ブログ)。また、中国やベトナムのプラスチックウキも漂着しており、これらの人工物も南方由来の漂着物として認識できる。

オウムガイは砂浜の低潮線上の貝殻密集帯に漂着していた。表面には藻類と軟体部が新鮮なエボンガイの付着も認められ、漂着後間もないものと思われた。オウムガイの殻は損傷が激しく、住房部は激しく損傷しているが、螺旋部分の保存は良好で、表面の火炎模様も明瞭であった (図2)。住房内部の黒色帯はほとんどが剥離し、火炎模様部との境界付近に残存するのみで、磨耗の激しい部分は真珠層が露出していた。殻の残存部の長径は86.4mm、殻高67.9mm、殻幅56.2mmであった。

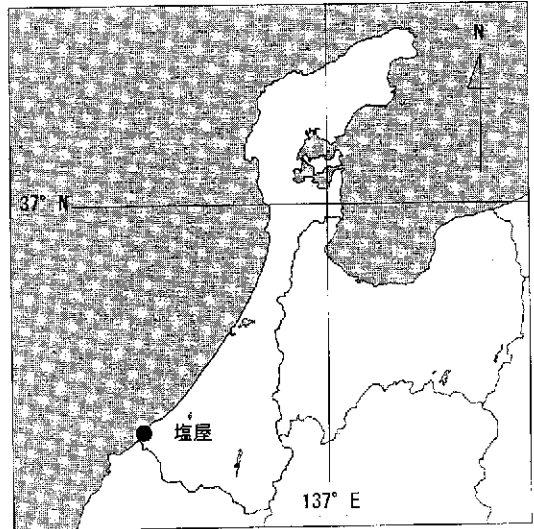


図1 石川県塩屋海岸の位置。

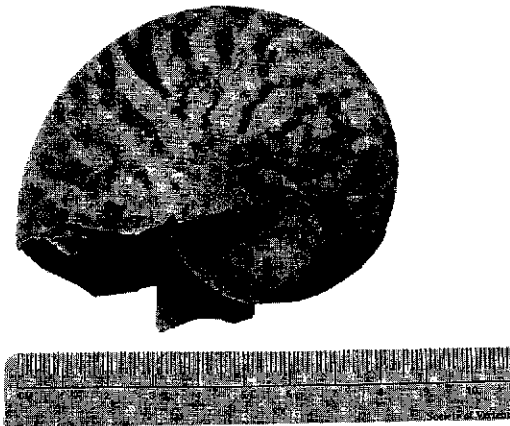


図2 石川県塩屋海岸に漂着したオウムガイ *Nautilus pompilius*。



図3 石川県塩屋海岸に漂着したオウムガイ *Nautilus pompilius* の住房部。

## 考察

浮力が大きいオウムガイの漂着分布は広範囲に及び、黒潮が優勢な太平洋側では茨城県以南、対馬海流が流れ込む日本海側での漂着は秋田県以南の海岸より報告されている（浜田 1965；中西 1990など）。しかし漂着後に採集された標本は損傷が大きいために、詳細な記録が報告されたものは限られている（浜田 1965；池田ほか 2006；鈴木 2006）。なお、これまでに石川県下でのオウムガイ漂着の報告は、1889年に能登半島の福浦港での一例があるのみである（浜田 1965）。

オウムガイは産地によって殻表面の火炎模様に変異が認められる（池田ほか 2006）。今回採集されたオウムガイの殻には、パラオ共和国～フィリピン近海に生息する一般的な模様と類似していた。住房部には激しい破損が見られ、さらに破断面上にはコケムシで覆われた部分が見られるため、漂流以前か漂流途中に割れたものと推定される。また表面や住房部内にはコケムシ類、カルエボシ、カキ類、藻類の付着も認められ（図3）、これは長期間の漂流を示唆している。

オウムガイが採集された前日の2010年12月22日、漂着地点に近い福井県三国市の気象観測データによれば、朝8時頃から深夜にかけて、風速6～7mの北北西の風が吹き荒れた（気象庁ホームページ）。こうした風の影響でオウムガイは漂着したものと推定された。

オウムガイの漂着分布は、熱帯植物の果実や種子の漂着分布とよく似ていると言われている（中西 1990）。塩屋海岸では2010年12月にオウムガイだけではなく、モダマ類などの熱帯植物種子も漂着している。こうしたことから、オウムガイと熱帯植物種子類の漂着分布はほぼ重なっているものと考えられ、両者の海流運搬における類似性を示唆した貴重な一例である。

謝辞：本稿をまとめるにあたり北海道教育大学札幌校の鈴木明彦教授には、論文の入手でお世話になり、粗稿を見ていただいた。また匿名の2名の査読者からは、論文の改善に役立つ貴重なご指摘をいただいた。ここに記してお礼申し上げる。

## 引用文献

- 浜田隆士 1965. オウムガイ類の遺骸漂流. 貝類学雑誌 Venus 24 (3) : 181-199.  
Hamada, T. 1977. Distribution and some ecological barriers of Modern *Nautilus* species. Sci. Pap. Coll. Gen. Educ., Univ. Tokyo 27: 89-102.  
林重雄 ブログ. Beachcomber's Logbook (<http://beachcomb.exblog.jp/>)  
池田 等・倉持卓司・竹山 紘. 2006. 相模湾沿岸に漂着したオウムガイ（軟体動物門：頭足類）の記録. 神奈川県自然史資料 27 : 87-88.  
気象庁ホームページ 気象統計情報 (<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>)  
中西弘樹 1990. 海流の贈り物, 254pp. 平凡社, 東京.  
奥谷喬司 2000. 奥谷喬司 (編著), 日本近海産貝類図鑑, pp.1026-1029. 東海大学出版会, 東京.  
鈴木明彦 2006. 徳島県鳴門市へのオウムガイの漂着. 漂着物学会誌 4 : 29-30.

(Received May 27, 2011; accepted June 22, 2011)

<sup>1</sup> 〒486-0844 愛知県春日井市鳥居松町 3-155

<sup>1</sup> 3-155 Toriimatsu-cho, Kasugai City, Aichi 486-0844 Japan

<sup>2</sup> 〒910-0017 福井県福井市文京 3-26-2

<sup>2</sup> 3-26-2 Bunkyooh, Fukui City, Fukui 910-0017 Japan